

2017年5月19日のITCL公演『十二夜』を観劇した学生の感想

(ここにあげた感想は、英米社会文化論基礎演習の受講生が書いてくれたもので、この授業では7月末に自分たちで『十二夜』を英語劇として上演する予定です。)

(1) ストーリーや台詞について

参考にした映画の比較的シリアスな雰囲気と違って、随所にジョークやギャグが盛り込まれた楽しい展開になっているのが印象的だった。特に男性の役者さんがメイドのマライアを演じていたのは可愛らしく、ところどころで男っぽく演じたりして観客を笑わせていたのは素晴らしかった。(MHさん)

サー・トービー、サー・アンドルー、マライアの三人がマルヴォーリオを騙そうとしている企むシーンが一番印象深かった。この三人は舞台を操り、マルヴォーリオの人生も操っているようだった。人生は常に人との関わりのなかにあり、それに操られて私たちは生きているというメッセージを感じ取った。(TSさん)

道化が歌いながら傷ついたマルヴォーリオに傘を差し出すシーンが最も印象的だった。愚かな存在としての我々人間の生に対する救済を象徴していると感じた。(YY君)



(2) 舞台上の演出について

船の難破を布で表現したところや、場面転換のときに役者さんが自分で歌を歌って音響効果を自分でやっていたのが印象深かった。場面の変わり目を観客に気付かせるようにいろいろな工夫がされていた。(DY君)

マルヴォーリオへの手紙に追伸としてもう一通投げ込まれたり、セザーリオとサー・アンドルーの決闘の時に真ん中に仕切りを置いて、そこに二人が隠れる仕草をしたりして、観客に見やすい舞台の使い方をしていた。(TSさん)

舞台に簡単な壁を置いていたがこれをすごくうまく使っていて、自分たちも真似したいと思った。(AMさん)

道化が太鼓を叩いて観客を参加させて笑わせていた場面があったが、観客と一緒に演じている気分になれて楽しかった。(MKさん)



(3) 役者の演技や発声について

大きい声を、無理のない感じなのに客席まで響き渡る声で発声していてすごいと思った。自分の演技中はもちろん、台詞のないところでの演技が素晴らしかった。表情や動きなど他の役者が演技している時でもできることはあるのだと思った。マルヴォーリオの最初の雰囲気と騙されてからの感じの変化がとてもうまく表現されていた。(TSさん)

声の強弱やトーンの差をつけることで感情をわかりやすく表現していた。悲しい台詞もただ小さい声にするのではなく声のトーンで表現し、観客の耳にしっかり届くように工夫していた。感情の起伏がよく表れていて理解しやすかった。(YDさん)

マライアとオーシーノを一人二役でやっていた役者はすごいと思った。全く異なる役を一人でこなし、なおかつ面白くしているのは素晴らしかった。(AO君)

オリヴィア役の演技が、何が何でもセザーリオを手に入れてやるという執念を溢れさせていてすごかった。事前に聞かれたワークショップでヴァオラ役の女優さん(レイチェルさん)にヴァイオラを演じる難しさについて尋ねた時に「彼女は最後まで自分の本心を表現できず、成り行きで動いてゆくしかないけれど、その心情を表現するのが大変なの」と答えてくれた。それを聞いてから演技を見られたので、彼女の演技の細かい工夫を詳しく見ることができ、彼女のうまさがわかった。(MKさん)

声がとても透きとおっていた。悲しい歌は小さな声になりそうだが大きな声でかつ悲しみを表現しているのはさすがだと思った。台詞がない時の表情も素晴らしいと思った。(AMさん)



(4) シェイクスピアが主張したとされる「世界劇場」の観念について

劇中の台詞にもあったが、人は生まれ持った性別や身分があると思い込んで、それを演じながら生きているのだと思う。でもヴァイオラが男装したように、その気になれば従来の自分とは違う自分を演じることができるということを、シェイクスピアは劇のなかで表現したのだと思う。(AMさん)

この劇では観客のみが真実を知っていて、そのことが面白さを生んでいる。でも現実の世界では全てを知っている人はいない。誰もが真実を知らないままマルヴォーリオのように騙されてしまって演技をさせられてしまう可能性があることがわかる。(AO君)

ある価値観や常識に囚われた人間は、その考えによって演じさせられているにすぎないという考えが湧いてきて、すっきりした。(YDさん)

この作品ではマルヴォーリオのように他人によって演じさせられる人々と、ヴァイオラのように自ら男を演じざるを得なくなった人が対照的に描かれていた。シェイクスピアは、全ての人が世界劇場の舞台の上におり、他人に操られて演技をしたり、みずから意識して役者になったりなどしているという事を熟知して、そのような様々な人生の形態を自分の劇で描こうとしたのだろう。(TSさん)

マルヴォーリオは演じさせられ踊らされることの象徴であり、「演じさせられる」様がどれほど滑稽なのか思い知らされた。そして自分の普段のふるまいもまさにその滑稽な演技なのかもしれないと気になった。(YY君)



(5)全体としての気づきと自分の演技への参考となった点

本場のロンドンのプロの劇はやはりすごいと感じた。この舞台の演出や演技を手本にして自分たちの劇に生かしてゆきたい。(TK君)

日本人は劇や映画を見てもあまり笑ったり感情を出さないと考えていたが、今日の舞台では多くの観客が大いに笑っていたので驚いた。これは日本人にも理解しやすいユーモアの演出のおかげだろう。(YY君)

それぞれのキャラクターが自分と闘っている様子や、心に抱える感情の変化をどう演じるか、この劇を参考にして考えていかななくてはならないと思った。テンポのいいかけあいのシーンなどどう演じるか考えなければいけない。(TSさん)

7人という少ないキャストで一人が何役も兼ねたり舞台装置を動かしたり、チームワークが大切だと感じた。授業で割り当てられた台本を見ると台詞が多いと感じたが、それよりはるかに多い台詞を覚えている役者のみなさんの演技を見てみると、これくらいの量でくじけてはいけないと思った。彼らの練習量はすごいのだろうと思うが、我々も練習してなんとか近づきたい。(MHさん)

私はオリヴィア役をする事になっているので、特にオリヴィアの演技に注目して見ていた。恋に落ちた時の表情や視線の位置、声の高さの工夫が素晴らしかった。恋する相手と会話をする時の少し恥ずかしそうな仕草や、嬉しい時と悲しい時の気分のギャップを、今回の役者さんの演技をお手本にしながら自分なりに工夫してみようと思った。観客を笑わせる表現の工夫はないか、考えてみようと思った。(MSさん)

「とにかくすごかった」の一語に尽きる。英語という事を忘れて、劇そのものに引き込まれた。ワークショップの時に役者さんが言っていたように、観客を巻き込んで舞台を作って行くのが大切なのだと思った。観客を味方につけているからこそあれほどまでに素晴らしい舞台を完成できるということがわかった。役者さんはみんな演じることを心から楽しんでいたように見えた。だからこそこちらも見えてとても楽しかったし、こんな劇を

私たちもやりたいと思った。演技をして多くの人に見てもらうのは緊張するし恥ずかしいという気もするが、今回の劇を見て、恥ずかしさとかは全部捨てて役を楽しみたいと思った。(AMさん)



(ここに掲載した写真は ITCL の許可を得て使用しています)